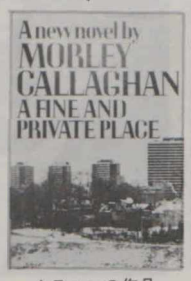
ジャンルとして確立されたのは、まさにこの大平原地帯においてであった。カナダ小説史上、最初の主要作家といえば、フレデリック・フィリップ・グローブであろう。彼の前歴は長い間謎とされていたが、最近になって、カナダに移る前はドイツで小説家フェリックス・ポール・グリーブとして活動していたことがわかった。一九〇九年にどういうわけか突然ドイツから姿を消し、三年後にひょっこりマニトバの学校の教師となって現われている。カナダ人としてグローブは二冊のエッセイを書いた。「平原の小道の彼方に」(一九二二年)および「年の曲がり角」(一九二三年)がそれで、大平原の自然のもつ美と恐怖をよく表現したものとしては、現在でも最高の作品といえるであろう。これに続いて彼は、開拓農民たちの、自然と自己の感情とに対する闘いを描いた一連の小説を次々と発表した。これらは少々の欠点はあるが、力強い作品であることは間違いない。中でも「前進する移住者」(一九二五年)は、彼の暗い自然主義的な存在観を最もよく表現している。しかしながらグローブは、完全な自然主義者であるにはあまりにも詩的な精神の持ち主であった。彼の最も野心的な、また人によっては最もすぐれた作品といわれているのは、たゆみない機械化の発展を象徴的にうたった叙事詩「水車小屋の主人」(一九四四年)である。



カラハンの作品

一九三〇年代の作家で、地方を描いたグローブとは対照的に、都市を描き、カナダ人で初めて国際的な評価を得たのが、モーリー・カラハンである。カラハンは一九二〇年代に作家としての活動を開始し、一九三〇年代にはたとえば「彼等大地を相続する者」(一九三五年)のような簡潔な道徳寓話を次々と書いた。一種の社会主義的キリスト教主義により、不況時代の社会的沈滞の裏にうかがわれる不思議に詩的なトロントの素顔を描いた作品群である。トロントはカラハンが人生の大半を過ごした町である。これらの作品は、現在においてもカナダの最も記念すべき小説の部類に入るであろう。

カラハン

一九四一年に二冊の古典的な小説が出版され、一人の注目すべき小説家の誕生を見た。小説の方は、シンクレア・ロスの「私と私の家」およびヒュー・マクレナンの「気圧計上昇」の二作品である。「私と私の家」は芸術的にもかなりすぐれた作品で、バランスのとれた形式といい、風と土埃の只中に孤立した平原の開拓村の雰囲気をよくとらえていることといい、また、土くさい開拓者精神からようやくぬけ出しつつあった頃のカナダに生まれた芸術家の苦悩を早くもとりあげたことといい、カナダ文学史上の古典に残る意義は十分持っている。しかしロスの以後の作品には、「私と私の家」で期待させたようなものは生まれなかった。他方、ヒュー・マクレナンは前作以後も次々と作品を発表した。これらはいずれも文学的価値のためというよりも(一九五一年の「各人の息子」はカナダで最良の小説に入るが)、カナダ人の意識を悩ませているテーマを常に取り上げたために、一九四〇年代ならびに一九五〇年代のカナダ文学界を支配した作品となった。たとえば、フランス系カナダ人とイギリス系カナダ人の関係を扱った「二つの孤独」(一九四五年)、カナダとアメリカの関係を追求した「断崖」(一九四八年)などがその好例である。マクレナンの欠点は、間違いなくすぐれたエッセイストである彼が、エッセイ風に小説を書くことが多く、一度も新しい実験を試みたことがないという点にある。

マクレナンの「気圧計上昇」

マクレナンの保守的な技法はそれ以後のカナダ小説界の主流をなしたが、一九五〇年代後半に入ると、シェイラ・ワイソンがその唯一の作品「ダブル・フック」(一九五九年)において、以後のカナダ小説の一要素となった幻想的な傾向を確立した。もうひとつの傾向はエセル・ウィルソン(「沼地の天使」、一九五四年)が作った。筋立てに気を使いすぎると人生の意味に盲目になるということを、彼女はアイロニーに満ちた優雅さで示した。モデカイ・リックラーの風俗風刺もひとつの傾向である。リックラーは初期の自然主義的な作品数編を書いた後、この風刺的な傾向を打ち出し、代表作「ダディ・クラビッツの徒弟時代」(一九五九年)ではこれにファンタジーの傾向を付け加えた。だがシェイラ・ワトソンとエセル・ウィルソンはそれから約二〇年間も黙したまま語らず、リックラーも書くのがだんだん苦しくなってきているようである。このような状況から、一九六〇年代、七〇年代のカナダの主流小説家をあげると、マーガレット・ローレンス(「占い者」、一九七四年、は平原生活を描いた一連の素晴しい作品の中での最高)、ロバートソン・デービス(「五番目のビジネス」、一九七〇年、は豊かな形而上派になったアイロニスト)、マーガレット・アトウッド(「食べられる女」、一九六九年、「浮上」、一九七二年、などの作品は神経症的なフロンティアをがっしりとした手法で扱かっている)などがいる。その他、マット・コーエン、マリアン・エンジェル、オードリー・トーマス、ヒュー・フッド、ルディ・ウィーブ、ロバート・クローチなども活躍しており、彼らの最近の作品を見ていると、カナダ小

「ダディ・クラビッツの徒弟時代」

ローレンスの作品

モデカイ・リックラー